守礼之邦

砂糖黍の乾いた葉擦れに
埃だらけの緑の畑に
届かぬ想いがかすれゆく

僕はたぶん哀しんでいた
君が素足で踏んだてんさぐの花が
僕の心に滲ませた色の鮮やかさを

赤い瓦に魔除けの獅子が
戦に破れた人々の傷と祈りを

目くるめく陽に向けて語り続け

僕は歩いてもいたろうか
うち騒ぐ観光客達の笑いの間を
淋しくも、かつ、静寂を求めて

潮騒は穏やかな毎日の如く
風は優しげな愛撫の如く
守礼之邦は早や、夏の花を咲かす

(1985.4.30)